関ヶ原軍記

三編 九一 九二

へ遠13
2207
41

門へ遠13
補2207
巻41

牛込 沈清

関ヶ原軍記二篇巻之廿三

目録

一 星野豐二所太夫石田に附る事
并田中治部太夫三成を召捕事

一 石田三成三井寺御陣に参獄中大言壮語事
并井伊直政利家三成納得の事

徳川十五代記 編
春雨文庫 編 敵討華野權三代記 全部十五冊
近世記聞 編 明治太平記 全
開明小説 鳥追於松實録十五 大尾 編
珍説 夜嵐實記 全
近世 松村春輔著 櫻田實録 全
近世 小倉青木實記 全部 近日出来
書物繪入 貸本所 東京牛込細工町 誠光堂 池田屋清吉謹白
参考 肥長 鹿児嶋士傳 編
此書なるや出軍古卒の日記或は戦地より歸京せし探偵人等の説話を因り西國証討の如実を詳細なる第一の實録なり
這は徳川家の旗下なる青木弥太郎小倉藩長吉唱妓賑ふ寺春精の事を記し泉偉強談の悪事を日本の奥方艱難心苦を記し實録の反絵綴りたれば近世の珍書なり

本入 池清

宮城縣立圖書館

関ヶ原軍記二編巻之壱

星野豊二郎 石田治部少輔
城郭の事 三成を石輔事
并田中治部大輔

いしくの石田治部少輔の古橋村
の屋敷と二所ヶ方江流く
忍び居る事と星野ヶ関又左衛

つくれを吹てたゝ二府寺吏三吳見
城加ゝ係ゝ之船りおりぐ間
中之郡寺博ゝ
人数弘来りて石田城百捕大津
三井寺ゝ百吳之体あり見
苦数也ゝ　内府公より
佛小袖城下され清菓子城内
三放大ひゝ罵りまる痛氣頼り

ありさいゝ先第ゝ猿茅城用ひ
ぞ仍ゝ井伊直政對面して
利害とゝくゝ石田ゝんしゝく
畏生之樗鞠段刑罪と影る
爰手後第中洞之秀家命の
ぜんと投奪之
来思爰御立猿あり去形ぐゝ
本多ゞ忠義の微実をゝくく

感じのひく様細に覚えり
御免なり

兵書ふいろく白話稲雑
きて渡辺の細しへり借矣
水戦矣なるく懐懐ふ吸せる
この古今往来の通達
考証上下にお同じさんば
石田三郎 源田秀家などい

ふをみてうを矣の戈智ふ
三郎千秀家ハ中ふを源田
秀家ハ実父直家ハ
八才の時分 亡父直家ち
この七月古太閤ふしのみ
るゆゑなりぐぐく秀吉
公乃子ふみて中国後前
一郎一郎千ふり大

名をつぐ英をそ
し天下は独走す
今二百の大軍と幸し
て出張せしを
もそ白龍橋あつて
世界こそ輪鏡大海の
潮を吹のありさまなりし
ちるそ鹿裏忽ちふ変

まく国ケ系は一戦す級ぬ
汐後を高人と知りく
石国も海国も分りそぐ
ふ加りて海ゐしくも民
そ交りう奴僕のそづう
しめとうけて末代そ名
地稼を洗れ芸これ偏へ
白龍をみうと離をて勢ひ

地獄に堕ちる父の網に入り縛
られる大魚よりて大海にて
いと苦しとなるといへども平砂
平らなる時にきいきいひ地
獄に流れ出る大魚は冷ま
じきも煖煖の熱集まりて
身を吸吟んとするもすべき
やうなくこうれげてあふ

身を絶まきする皆形のごと
き雲雷の時に大きなる働
くるふて小出はちらし
まるだんや平生の人をふ
りて怒量ありて驚能遊
者ずてをもぶるをとれい
形のごとく町人福者して
も無手物ありてある時に

いさかひつゝ死人のるゞり
物ゝかゝり或ひい人のこゝろ
入き代苦悪代ふる是ゝざる
こゝろのの内洋刺いるふ
ゝどの人ゝても時せりを
考ゞへ時ちを待るゝこゝのゞ
こゝろ人ゝ〳〵ゝ考ゝ者
ゝていゝ形ゝゞ人を偏る

ゝるゝれゝゞ貞心ゝてゝて
きべきゝるゝ人勢ひ或
ゝるゝ時いゝる加人を同
じゝるゝりきのゝまゞく
親しゝ人も気ゝ毎ゝ不
奉代ゝのゝるゝ有ゝぬ風情
代ゝるふゝ葉ゞゝ自ぜんと
遠ゝるゝりゝれゞ人ゝ変

合ざるに至てはつゝしみ慎べ
今銀世物語りするやうれ
ものなり　古今
秋七夕　鏡ま物語ものの
物語　たゝこそ為れ
知らみ　凡みくるらん
めんくはしもものもと
れたるにこげね

所の屋ぶ事なり扨石田源
四郎義ん流浪の身と
なるとい芸笑の屋ぶ
古今人世物語る例
多一家人と物語りるも
遅延寄くるもはなり又不遅
して古捕らる事もあり
是天運乃ちゝしむる変

くいなの屋
去程に石田治部少輔三成方
より村の星理左二郎方へ使
に来るが女房いわとを
召列られし
型世話をして命より濃れるぞ
実乗の刑に成りなる屋敷
千田中の高人さぶれ

大切なれば孫十郎出る
屋敷世話なる治部仕るもの
に黄金百枚預るとうや
きくたうに預へ出く安楽
に一生を送らんやと左二郎
方へ使ひくに花も見べき
ものなり治りさいへども金りに
痛り故へ今又三日も思ひ

至るべき定めていづくへか出
んと思ひくるしみ給へども
いつの日か村雨降りしぼ
まれば又夫婦の方へ彼女房より
内々にて知らせ給ふ事又夫婦
つれ立ちくるの事をいふ故
び復世にも帰ひ事せんと
よ二所共に又夫婦の人が祈へ

ばかりくむ中れそ
れ石田三郎重郎が宅ふ忍び
居るうちと泥しんに出うり田中
与兵衛方へ入弟ね求めん
出る弟くの木の根をも見けて
弟ねる時に居るれぞうのうへ
城変くに大きに怪び田中伝
左衛門の妻人子

命じ給ふ三百人を率ひて浜田
庄右衛門殿大和と成て古橋邑
の与二郎吉安が家城を攻元亀
元年石田三成を小田原
笠城冠り居たりしが少し元
隆げこれ振れ切れのあるが
振労をしたるんの子細のある
歟尋ねたるに答へぬ

田中作右衛門殿知りて是
三成に物語る三成聞
刎ちめんなくして義弊を
元亀元年時に三成吉太閤が
陣頃の兼直の脇刀一尺八寸程
ひらと抜く陣中石田を
捕へまぬ

石田三成、三井寺御陣より林之御中
大言地吐ける
美井伊直政の利解にて三成納得の夏
初め岡中名組右衛門石田三成
地百輝殿に大使を引渡さんと
せしが大切の因人なれば去政
同意して取り組

内府公はるのむら地を上るる時
家康公大きり
御悦喜あつく逆鱗のあり地
うつくしき生るものへ出定めな
きも黄金を以てのち
市武運ありて
三成をば岡中去政をあづけ
なるべし列ち獄屋地つくり

入道殿書人きぐ〳〵表動
九郎　殿友ふ左衛門　田中芦素
三人地書ゞ〳〵ことしてあるる
内府公帰出さるゝ近日うれを
引出して刑部卿
高入道中べしそのるゝり
具重ゆく三歳ゞ拾ゝとるね
ゝ年〳〵久し〳〵山中と城

泥して下府紙ゝ〳〵へ
芦類ゞも足若〳〵破れ板
ゞ足る新ゝ形〳〵病重ゝ
てつれゝのゞゝ曹五ゝ
砂金して砂ゝ足や付るべ事
芦根ゝ右足〳〵山ゝと中之
ゝり花ゝ
い沸菓子代類又ゝ帰るゞゝ左
内府公ゝり

年遅ぎ也御さうぞくを掃んと
す此時因中長き添ふ成
指出くいふ石田どの
上様より山小袖山菓子等も下
されすり親子百髪丸山菓子
を乃載あり色々さて出色
々之如き此時貝を関て長
すしげる為服装とも

足家臣上様とも御ぐるゆるり
ゆくるねんば因中長へて
内府公ゆりさいふこの時三成
ゆくゆくとも折節ひいて了知
や上様とも秀頼公城中
ぶけ色々上様ちんどぎき
ふくまゆくこのびれ一乱
も起せり又病まるれ

バ食ものも重ものと見過ても
せんぢ又服を閑に仮田中に又
此命を中しかりれた
内府公御ものに成田を今年
ゆりても雪氣たるまじして
新のごとくいそぎ政事をして
小袖を為替さ世食ものも世
くすりも殺きもて刑罪の朔

地をせいらくの
しるしなり此時伏見近習侍小性衆
ものを扶へさてく御小袖或
殺りの菓子をも下さるん迚
又直政を仕ひ子をのかる
らんそんじ事なりと
中しかり時分
内府公御機嫌そんじ義もの

ども継ぎ給せる薩忍の母を
中ごの郎彼石田孫左
衛門の
家康が孫廉るり左右どの稚
病ものこる石田孫左衛門を年彼
これと幸骨せ給い
る紀下あるべや又家鄭の兄
苦くくも聖ども良士之稚より
あるべるべ聖勝利なる
年移て天下に名をとるべん者
なりそれを知る人こそ不矣
それらの御此なりるり此当家
雷のごとくおぼへられ皆
石田を知るのおとを聞
さてそれより井伊兵部少輔
石田が獄屋まで来りて田中吉政

法を用ひ
宰ふ者し
ると彼人を大
ずして融を知る人なり
るがごとく下僕のごとく加ふべ
きものをいづれ之紀綱
へく直政對面いたりし
るに面どの手いたる氣を恐
ひらに仕業なかるべし

とるに二加賀てこのせりを加
く業おそを用るりそこと
直政法めてものもう命に
ものるん法れ芸人を実力の
たるなみ行要るりそこと
業迎を博をとてたるも大尚
の籠居るり業りを用ひられ肢
氣あつく刑を待る事とて

武士は法なれば又小袖を見習ひ
主人の衣類を免板をもその
次第にうつるべしとて僕のごとく
なるべきや又此菓子は主君
内府公朝勤の例法を
見てなるべしと志しありいるれ
ば法の反るを別章のごとくに
なりいるべきやとのうたれば

石田も知りてく手伝ひらば
菅時時をぬのうりいらしう
新ぬのの菓子を強べ衣類を見習
ゆきんの菓子といんぎんをうと
を時政をねくるのうびは法
手ぐりいもうしを法働をるり
後代までも法時おぼるべ来
なり去ばぐ今度宣ケをれは

世一戦平分てい時高く
知られべしといふ三加賀
それゆゑ天保年より古今間
の出来秀作あつぶ秀彩々
をふるびて下に後へんものみ
知られりてくさ宮ケ原古
戦ひ弘高ものいらんべ
宮楽の御遅見物段るやこれ

いふ東政をもるい戦ひ
の中時方代働きといへべき
くにはり色い新方四中ゲ扱ひ
宮ゆゑざるゆへ三加情りて
代中形り東政を書いさ
史三加本人を紀大形を
人を宮くく刑罪り色い
世平井作ゲ入もの

ゆへ、なり行く日比強く
屋ゝで　内府公屋
ゑ御封ゝんの中せん　三加屋
都くもその般般まても哭
はせんゝ又ゝ乱もるまつく
以前のごゝ紀ありさ毎ちり
時年二加つゝしんでゝく
御運因出段ゝと斗りて都

の御ゝ中ゝんゝぞとるり

池清

池清

池清

関ケ原軍記二編巻之壱

目録

一 浅田秀家濃州の事
并進藤二左清忠義秀家と
為ら事
一 浅田秀家薩州へ下りて濃津
に頼む事

并鴻津義秀家とかくまつる事

池清

関ケ原軍記三編巻之廿弐

浮田秀家源泉の事
并進藤三左衛門秀家を
せめる事

寛平浮田中納言秀家を彼義
兵衛尉大夫別て大きなる武勇の
家なりしかるにこのたび関ケ

さて此合戦年ごろ負けてより
代人を修ぜし福嶋正則と戦ひ
京人多くうちしたがひ
つひに年級小しく伊吹山を逃
入りこもりしを山づたひよ
清別杉川谷まうちひらり
この時を信代相伴の人も附
過ぐひしりのもちうく

此度三度目つとりの一人
のこりうれを新参者を
三ヶ石城領をこの度の本の名本多三河守
を南手六十八文元来三別の
御信代にて本多八家の内
なりのもも武勇達者にて
諸畧もひろ信
信時一向宗の一揆蜂起のとき

和順汲場宮つ改六人の内は
く二郎を退拂ひ浜人にて
久兵衛妻子家人も親族の長
浦岡家そし三ふたとよへて家
来と成候くこの家中千有
しゞ今を人秀家家臣人と加
て遠りて時千この退度さぐ
き人借しあり今知ぐい

去別の大きうて一方は大ね
ちりそいども只今こいりて
月山浦の拘そこいこの三大事つ
一人ありこれ偏に軍法の
ぐこ玉家邦をて忠義あり
りとこの勝に為て幸い
知まぐるのりさればこの
を度一人供して浦見山のぐと

いつ比里ゟ見つる時こそ二度
中掛さても今此世ハ中をば
いつゞ見つ百ゟやまさいゞ方へ
浦志しあつく浦出かゝれ
ゟやと思ひ為ゟ秀家の同く
さればとゝ小西ゟ近衆親族
あり見物ち加別の利長ゟて
我屋ゟり後く親ゟ知ずゞ

ゟ中ゟりとい〳〵大軍ゟ引ゟ
ちゟ薩摩ハ浦法義ゟ浦衆
しゟ事もなんだゟふとゝぐ
海ちゞ斗らひて薩別より
きるゞ月い安衆ゟべしさん
ゞ薩別〳〵薩見ハゟゞとゝ
中さゟ度ゟ薩ヶ遥ゟ
ゟ国遠くしく抜ゟ大坂ゟ

出くるものなれば安危を斗り
がたしといへ共主君が為めなる
命を投げうんやといへば秀吉
笑て何が扨子細を問ばといふ
時に毛茂の云いやく強れば源四
郎殿と主君の蔓家
次の四刀と葉に成しうるひ
出いらるを下さるべケ様に

と謀略をもつてしといふ秀吉
笑ていつる様ともに軍に斗ひ
給ふとも有るべキ中納言秀吉の勢
城常に男ふ
い毛四の百姓
一夜の内に中を
四日に成るべ

ものみ、西洋路用のたくさん
拵為頂きてたちそんげ
大坂より沖迄へやさばとても
見を拵て車にのるべく
ひとて名所をもくも門離を
太刀と系図等拵くを茂三左
衛門と大津の三井寺へ参り
ところ　　内府公ちやや

御入洛為見京都彼是まで参り
ありの時又淀田小西安宅
等を見ねいべきちりと
ちりに　　内府公より
御下知あるよりて諸人ところ
多る実井るり見べくかやう
ある仮を見ねおるる時ありる
又詩歌ある事ありり叔進茂い

渡辺源八郎忠勝のうへ
ゆゑ対面してくるい近年
来て源四郎年始ゆゑも
内府公の御勘気蒙むり給る
ゆへ年は奉行飛騨おうぎざる
事なりこの方ゆゑ吳服の図形
川岸ゆ移く南主人秀家様
地対ていは移秀谷へ高せ来

拾年仕りて源四郎
家重代の太刀ゆゑ年系
おゆゑ拾年仕はいつぶゆゑへ年
年来の御勘気
御免
郎ひ奉りおよそこの二月の
御地正しき事ゆへ
ちうのぶん地
中山ゆ拾ゆ
内府公ゆ
家康公

為く蔡蒙家次の古刀は有者
ふ見て百くしびく
御領有て御見へ有るを
ものと　御一領有ところ
紛れるもの太刀なりその上国
もくづひるなり後く
内府公ゟ被太刀代御手ゟ入り
しを御拝び有りて又四好の

本国三河ものにて
作出さるゝ和のむきい三河守
先年依御一振を貴形ゟ
不届きのものゝ
ものゝ手ゟ
此しびの方せつを感ぜる有
三ヶ石城下さるゝ有て
内書院ゟ入ゟ
きられゝ扶落四

い滅亡せ〳〵ゆく弱ぬる手い及
ぶべくと　作出されるに依
て秀家を頭　屋〳〵薩州へぞ
下りける

浦田秀家薩州に下りて鹿津
城籠むる中
黄義弘義ふ紛て浦田城ゆく

いそ〳〵彼前中納言秀家を浦田
邪の櫻むの天聴の所在つ
ゞ依拠して大坂まで落のび
給て九州筑前の国へ下り
ゆく〳〵として薩州へつく
るの七月鹿津を秀家の弟兵
を引うんとの見壹所
のところを遥〳〵と来りて助命

の報ありて驚く
内府公は報ありて伊豆に大船へ
乗流せらるる及ふ不意の変あり
福島伊予守は海手に及ぶその
子細は伊予守秘蔵の狼藉に防ぎ
其人員不足を伊予守後家
なれ初むるせり福島正則上京
の折から三条大橋の橋を破る

ふ家り後方を防ぎ留る
福島家人吉村下兵衛小笠大
橋等お働きて人元ふ多し
このせり井伊中多柳原
三将出く和順引きそく福
島正則憤怒して山科の陣所
門をしめ籠りたむろ
既に伊藤和と負ぎん

あらんかぎりをつくして後世
まで光りをかがやく事
疑ひなしけるも
名をいろくしろくの利益
ふかくこころのまことをつくし
古語のごとく流石に
東照宮の眼鏡のおぼしめし
御大切なり本多三河守殿
謀略をいのこりの屋敷
ゐあらんかぎりをつくしたまひ
ぬこころをもて後世のせ
らんとの時に人の
智恵をあつめ計
略をつくしてきわ
もこころをかけてい天を
の底までも尋ね地を大海
天地の

利をうれへ人のうらみ
計りなり只今のうへ
なりとも忍ぶべきなり
東照宮を宮中神のごとし
中ゝ計略なるべし為ざれ
ども　君あらざれども
兼ゝ為国の志なれば
金ゝ

思ひ取るべき本

多二郎を知りて彼の刀
献ぜんの利をうるべし
知るべくは法ゝ速ひて
海内を死亡せるべし
ゆゑに法ゝ
秀家を無の中廣く
く遠薩ケ千ち
神霊のごとし

閑房公さまのおぼしめしなどを深く
今日のごとくも人城諸畧事
為ならんとそれその利ある事
をいかりゆゑ逆乱をもて
我知らぬ世ふ組一同忘れる
ものもあるべきをもてこれをもて
能くく考慮一中べきこと
なりひ合ものもその
好みをとものごとくなる
そのごとく好みをなすべきを
諸る時はいかに自由なるものなり
此日用をこれを生て為好
法師の業ばかりなるごとく
思惑していやなる事を勤
め面白事を行ふ事を除くの利
なり

後光源院中納言秀家卿の
國山中へ進度之旨つゞけ来る
事　白樫村の天神の社内
ゞ命乞して幸いのちと仰り
九郎と云つる奴僕ばかり
大坂へいとり布袋二ほゞ御来
より和と借て布袋来又
兵庫へいとり居城へ送へ
して籠城の図箱崎へ着く
夫より薩州へ図へ志
は旗物を見
前人の所と
ゞ長刀のうへ
一夜報を
例へつれ
ましてやり

食図

また日向の國まいりけるところ
まで大ぜいくに休息しそれ
より薩摩の國へいり宿さ
へ入りて鹿津山庫路の舎弟又
七郎太郎うへこの旨をもや
入道殿へ仕度よしをねがひ
そのさゝを食用意の体にして
不審を事なりといへ共無神な

るものもとを事なりと山庫路い
事に拵をもとゝ届げいひ甲斐
もなる紀人なれ立花宗茂を小所
なりといへども長崎柳川手
強陣を張るその人を二ケ所
のあるゞそうしてうけたる
者ゝ邦兵今に体い形人ごと
しといへども壱所のところを

さるべくとこの清津を新たん
と来りしかば義れなる志し義
ふまつくおきて面ぐるしく
よりて対面きべしとして
呼入きられしにその清盛義
なりいかんと彼く衣服を被れ
髪を結もたくて下僧のごく
うちげむしれ面ちげ有とも

只一ぢで清津能仍同く義弘同く
忠恒等の三将を以有様ぢて扱
もふ使者を所ぢられ叱るとも
天下大事の人として侍家
美作国の大きなる身がいう
なれば中もおそりなる仲い
何なりでまるの人畜という
ぢなる人ありて去ぢらく

さうの清津家と称して来り
きたりものを京都に送れん光家
ふあるべしよりく武つの習ひ
なれば新まるべしいそぎ夜叉
地名碧色切水して食るを後
されるとやされるとだ秀家い
手を合せてよろこびこの品後
を見せれやと慶くして命

だりを聞るやうにて
関東に陣所ひ下さる清津新
入ることやさるる清津も新形ど
法歌ありさいく方形のごとき
貫尾坂鳴津親子も承知して
先指くくに寄家に居られる
と止まりり

池清

冥ケ原軍記三篇毫の巻二終

池清